



Q2 熱性けいれんとはどんなけいれんですか？

A. 6か月から6歳未満のこどもに多くみられるけいれんで、38℃以上の熱を出したときに起こります。脳炎などの「脳にダメージを与える病気」や「毒になるものが体にたまるような病気」がなく、急激に上がる熱にこどもの未熟な脳が反応して起こるけいれんを言います。日本人の8%くらいに見られるものです。熱性けいれんは発熱後24時間以内に起こりやすく、けいれんが起きてから熱に気がつくこともあります。脳がダメージを受けて起こっているものではありませんので、後遺症や障害が残ることはありません。体が突っ張った後にピクピクと手足を震わせ、白目を向いて顔色が悪くなるのが一般的な形です。多くは1～2分、長くても5分以内に止まります。けいれんを起こしているときに嘔吐して吐物を気管に詰め込まない限り、命を落とすことはありません。けいれんを起こしているときは、顔を横に向けて吐いたものが外へ流れるようにしてください。熱のあるこどもがけいれんを起こした時、大部分は熱性けいれんに分類されるものですが、ごく稀に脳炎によるけいれんが紛れ込みます。その区別が重要になります。

Q3 たちの良い「熱性けいれん」と「脳炎によってけいれんを起こしている場合」の症状はどのように違うのですか？

A. 次のような場合は脳炎の可能性があり、医療機関で詳しい検査を行う必要があります。

- ・けいれんが15分以上続くとき
- ・立て続けに何回も起こるとき
- ・けいれんの後に意識の障害が長時間続くとき
- ・熱が何日も続いたあげくの果てにけいれんを起こした時

Q4 急に熱が出て、手足や体がブルブルふるえています、意識はあります。けいれんですか？

A. 急激に熱が出るときに、寒気でふるえが来ることがあります。意識がはっきりしていればけいれんではありません。通常、熱が上がりきってしまえばふるえは止まりますので受診の必要はありません。寒気がおさまり、手足が温くなるまで、保温して様子をみましょう。